日本語教育が必要な児童の教育支援の在り方

山口市立平川小学校

１　研究主題について

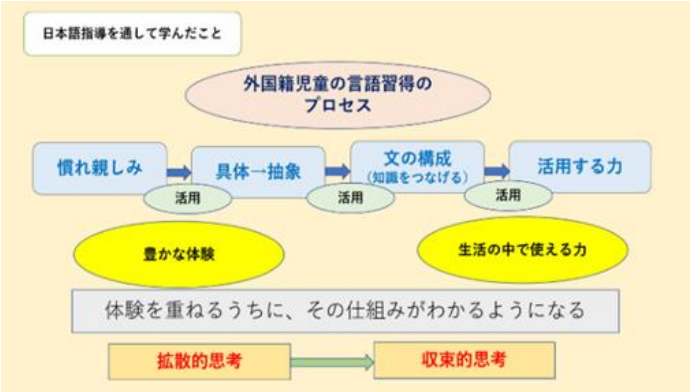
本校には現在５カ国の外国人児童が在籍し、２カ国の外国人児童が転入を予定している。本校における日本語指導が必要な児童の教育支援をさらに充実したものにするための研究の必要性を考え、この研究主題のもとで多面的な実践を図ることを考えた。

２　個々の実態やゴールを見据えた日本語指導

外国人児童の学習支援にあたっては、個々の実態に応じ、「取り出し指導」と「入り込み指導」とのバランスや児童の心理的ストレスを考慮しながら日本語指導のステージを進めることが重要である。「取り出し指導」では、特に学習内容を理解し、児童の思考・判断を支える言葉の指導を大切にしている。これは教科書が読める力であり。授業中に飛び交う言葉が分かる力である。

本校に転入学した外国人児童には、まずカードを使った簡単な日本語能力や計算能力の確認後、ＤＬＡ（対話型アセスメント）と呼ばれる測定ツールにより、それぞれの語彙力チェックを行う。基本的には、その結果をもとにしたＪＳＬ評価のステージに応じた支援を行うことになる。本校では、それを参考にしながら、大まかに左図のようなステージでの支援を実施している。

外国人児童が自力で通常の授業を受けることが最終ゴールとなるわけであるが、日本語指導の内容に大きく関わるのは、外国人児童やその保護者それぞれの意向を尊重した対応である。特に低学年児童では、保護者の意向が大きくウエイトを占める。



右図は、本校児童の日本語習得の状況についてまとめたものである。外国語教育における言語習得のプロセスに重なるものであり、豊かな言語体験が大切であることを改めて認識するものである。

とりわけ来日してから間もない児童や、低学年児童には、「しっかり聞きしっかり話す」場づくりが有効であり、「使いながら慣れ親しむ」中で、母語とのつながりをもとに日本語の仕組みを理解していくと考える。

生活言語である母国語形成ができている児童は様々なものの名称や表現、また言語形成のための知識や技能をインプットしているため、言語習得のハードルが低くなっている。

日本語教室は、児童の自己表現の場づくりも担っている。通常の教室の中ではなかなか自己表現ができなかったり、思いを伝えることができなかったりする児童の思いや考えをしっかり聞くことや、母語での自己表現をする環境をつくることにも努めている。また、児童の生活状況や家庭環境、文化・宗教に関する情報などを収集し、担任と連携しながらよりよい支援へとつな

げるようにしている。児童が学校内だけでなく、社会とつながることができるよう、社会とつながるための言語能力を育成する必要もある。一人一人の児童が、日本での生活経験を基盤に、いずれはグローバル人材として、それぞれの母国と日本をつなぐための人格形成を見据えた支援である。

３　取組の具体

（１）　学習状況の把握と共有

個々の児童の学習成果や使用している学習材などをそれぞれの名前が書かれたボックスに入れ、児童が自分で取り出したり、収納したりできるようにした。学習記録カードも導入し、日本語教員間での個々の児童の学習状況の共有が容易になった。

（２）　国際学校の特色を生かした国際教育

校内の数カ所に７カ国語での名称表示をし、パソコン室前の海外資料の再整理をした。

また、外国人児童の保護者から提供してもらった写真やプレゼン資料をパネルにまとめ、児童が最も多く通るホールに設けた「国際コーナー」に掲示した。併せて海外生活経験をもつ教頭の協力を得て、現地の衣装や異文化理解につながる資料を展示した。

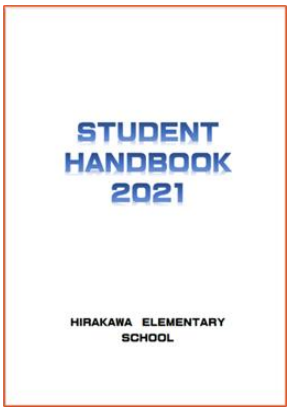
こうした取組は、本校に多く在籍する外国籍児童をマイノリティのままにしておくのではなく、他の日本人児童が異文化に興味や関心をもつことにつながると考えている。全教職員に向けた通信「グローカルだより」による情報発信も継続している。

（３）　外国語教育との連携

保護者からの情報収集をもとに外国語科の異文化理解に役立つコンテンツ作成を進めている。これは主に高学年の外国語科における「言語活動を伴った異文化理解」に関わるもので、現行の教科書にある内容を本校児童の母国の生活文化に置き換えることでより生きた学習が実現すると考えるものである。

（４）　保護者との連携

保護者との信頼関係を築くため、日本の学校教育を理解していない保護者に対する「学校の見える化」に努めている。日常的に学校や学級からの様々な配布物の翻訳や、英語を介したメールでのやりとりにより、児童の様子を伝えたり、保護者の思いを聞いたりするようにしている。児童の育ちについての相談をしてくる保護者もおり、学校への敷居を随分低くすることができていると考える。本校の教育活動内容を説明する英文パンフレット「STUDENT HANDBOOK」も作成し、編入学の際にそれをもとにした説明をするようにしている。併せて、毎朝の健康観察や欠席連絡を含めた日々の連絡が難しい保護者のために、QR コードと Google Form を活用した健康観察も始めている。



（５）　外部人材による支援

本校には、年度途中に突然編入学をしてくる児童も多くおり、そうした児童のために、現在３名の外部の方（外国人２名、日本人１名）が通訳支援に来てくださっている。

翻訳機器や翻訳ソフトには限界があり、児童の母語をうまく訳せないことから生じる問題もあるため、保護者に特に大事なことを連絡する際にもこうした通訳者の支援が大きな助けとなっている。

（６）　地域・社会の教育力との連携

本校校区内の山口大学には、留学生支援センターや「ＬｉＶＩ」という通訳ボランティアサークルがある。地域には留学生支援や地域住民との交流促進をする「ひらかわ風の会」という団体があり、外国籍児童の家族の支援を行っている。

県国際交流協会は日本語指導を要する児童の支援活動を加速化させており、県教委との連携も本格的に始めている。こうした団体等との連携強化にも努め、協議や情報交換の場を積極的にもつようにしている。こうした中で、学校だけでは成し得ない地域の教育力を生かしたより幅広い支援が可能となる。

また、青年海外協力隊ＯＢによる外国籍児童のための日本語教室が毎週木曜日夕方や夏季休業中に開催されており、日本語教員がこの教室の支援にも参加している。情報共有をするとともに、児童を多面的に見取り、よりよい指導につなげるためでもある。

県内にある日本語学級や国際学級とのネットワーク化も始めた。現在は、情報共有や学校訪問により先進的な取組を学ぶことから始めているが、いずれは県内の日本語指導のシラバスを作成することや、大学との連携による県内の日本語指導の充実を支援するセンター的な役割を担うことも視野に入れている。

（７）　オンライン交流

Google Meet を活用し、帰国した児童たちとのオンライン交流に取り組んだ。これは、外国人児童の転出入が頻繁にある本校の特色を生かすものである。昨年末には、バングラデシュ・ブラマンバリア在住の児童と在籍していた学級との交流、バングラデシュ・ダッカ在住の兄弟とそれぞれの児童が在籍していた２学級との交流、インドネシア・スラカルタ在住の児童が通う小学校と在籍していた学級との交流を行った。インターネット環境を活用し、別の端末で校内を移動しながら、より多くの児童が参加しての交流も実現した。

リアルタイムでの交流は、地球上の友達が同時進行で「今」を生きている実感をもつことにもつながったようだ。また、帰国した児童たちとつながることで、様々な国際教育の可能性が広がるだろう。こうした交流を今後も継続するとともに、高学年児童においては、外国語を活用したコミュニケーションの場としても活用を図っていきたい。

４　おわりに

本校では外国人児童が当たり前の景色の中に存在している。しかしながら、その子たちを「外国人」というまとまりで捉えている児童が多く、それぞれの母国の文化や言語に興味をもって関わろうとする児童は少ない。本校における日本語教室の役割はまだまだ多く、解決すべき課題も多い。関係機関等とのネットワーク構築を進めると共に、課題の共有や情報交換に努め、よりよい指導へとつなげていきたい。